

<特別寄稿>

吉川勝秀さんのご逝去を悼む 四万十川の恩人を偲んで

西内 燦夫*

「流域圏」と云う言葉は、シンプルな響きで、現在でこそ頻繁に聞いたり使ったりするが、私が四万十川に居て、その言葉を最初に聞いたのは今から20数年前であり、当時では「大いなる納得と新鮮さ」を覚えた。その言葉のおかげで「次なる行動のヒント」を掴んだのだが…その言葉を聞いたのは「吉川勝秀さん」からだった。

当時の「四万十川」はNHKの全国放送をきっかけに、世間の耳目が集中しはじめた時だった。その四万十川では「観光」という作業に経験の少ない人々が、都会の人の好奇心に対して「対応すべき準備や理論武装」を未だ模索している最中だったのだ。

その頃の四万十川には2県12の市町村が在り、その行政間の「目に見えない壁」によって、流域全体での四万十川に対処する為の意志の統一が出来ていなかった。都会の人々の「加熱」を知るにつけ「焦り」を感じ始めた時、吉川勝秀さんの「流域圏」と云う言葉のお陰で「連携」という具体的行動へと展開できたのだった。

「川は点じゃない！線だ！面だ！それが流域だ！そして…そこにある文化を感じろ！」…その吉川さんの言葉を機に四万十川では「上下流の交流」「官民の連携」後には「世代間交流」を模索するようになった。今思えば「吉川勝秀さん」とは四万十川では「橋本大二郎知事」と並ぶ「流域連携の恩人」だったのである。

そのお二人のお陰で四万十川流域の多くの「環境保全とまちおこし」を目指す民間団体がひとつになって活動を始めたのである。それが「四万十川流域住民ネットワーク」である！その発足以来…吉川さんは四万十川を客観的に見ては的確なアドバイスを呉れたのだが、それが今も四万十川流域保全の為の活動に大いに役立ち続けているのだ。

吉川さんの話の中の「河川」とは、その地域の文化や文明をもってして語られる。高知県出身者でありながらも「お鼻真つで一方的な熱情」ではなく、理論的かつ冷静な視点で四万十川を分析してくれた！従って四万十川の人々は世間の「熱病のようなブーム」を感じながらも、吉川さんの、ある種の「戒め」に似たエールに感謝したものだ。おかげで四万十川の流域住民は、地道な活動を今も続けられているのだ。

* NPO 四万十川流域住民ネットワーク 代表世話人

昨今の「四万十川」には「未来の曖昧な予測」や「現在への自己満足」ではなく…「過去の冷静な分析」が必要なのだが…吉川さんの文献にはそれが多くある。そこには「科学者の本質」があるような気がしてならない。

吉川さんは多くの著書を残されているのは有名だが、そこでは「河川」「環境」「行政」と並んで「福祉や教育」を切り口としていて、工学博士らしからぬ？人間臭い分野にも研究の素材を求めていた事は驚きである。そしてその実践として「企画・立案・実行」された事業の中に「川での福祉と教育の全国大会」がある。これは昨年で14回を数え、北海道から九州まで多くの地域で開催されて来ていて現在も発展し続けている。

この大会は「治水・環境」と「健康・医療」そして「教育」が三位一体となって議論される大会として注目されている。過去、四万十川でも平成17年に開催され、その時は吉川さんと橋本高知県知事も出席してくれ壇上を飾ってくれたこともあったことは記憶に新しい。

そんな「違う切り口」でも活躍はしていたものの、基本的には「川好き」だったので、おそらく天国でも「天の川」の研究を始めている事だろう！私が何時の日かに追いついて出会う時には、その「天の川」を舞台にした「川の話」や「流域圏」の教を乞う事になるだろう…それまでは少しの間お別れである！

合掌



御著書の一部



雲の上梶原町庁舎
の雛人形の前にて



四万十川の躰「向山沈下橋」にて

四万十川には多くの「沈下橋」がある。ある時そのひとつである「長生沈下橋」へご案内した。「地名としては“ながおい”と読みますが…時と場合によっては“ながいき”と読んで下さい！」と説明しながら渡った事を思い出す！

(原稿受理 2012年1月20日)